『相棒-劇場版Ⅳ-』スペシャルインタビュー

企画・制作 朝日新聞社メディアビジネス局
広告特集

エンターテインメントを超えた社会的メッセージがここにある

「国に捨てられた存在」からの日本への警鐘が我々の胸に突き刺さる

前作『相棒-劇場版Ⅲ-』の公開から約3年、そして現在「相棒シーズン15」が好評放送中の超人気ドラマシリーズ「相棒」の劇場版第4弾が2月11日から公開されている。今回「相棒」を観て、すっかりそのとりこになってしまったという憲法学者の木村草太さんに本作の魅力をうかがった。

一人ひとりの人生を大切にする。これがない場所に正義は存在しない

木村 草太さん

きむら・そうた／首都大学東京教授（憲法学）。1980年生まれ。東京大学法学部卒業後、同大助手、首都大学東京准教授を経て現職。著書に『平等なき平等条項論 equal protection 条項と憲法14条1項』『憲法の急所 権利論を組み立てる』『キヨミズ准教授の法学入門』『憲法の創造力』『テレビが伝えない憲法の話』など、共著に『未完の憲法』『憲法の条件　戦後70年から考える』『検証・安保法案　どこが憲法違反か』など。趣味は音楽鑑賞と将棋観戦。

この作品が初の「相棒」でも十分楽しめる

実は僕、ドラマ「相棒」に関しては初心者なんですが、この映画は本当に面白かったです。細かなリアリティーが積み重なった、次から次へと展開する内容に約2時間があっという間に過ぎた。もし今まで「相棒」を観たことがないという方にも、下調べなしで十分楽しめる内容だと思います。

僕は1990年代に、水谷さんがアクションドラマに出ていた頃よく拝見していて、アクションもシリアスもできる総合的な俳優だと尊敬していました。そんな彼が今作ではさらに動作もセリフ回しも絶妙にバージョンアップして成熟されている。特に印象的だったのが犯人を追って走るシーン。その姿勢が本当にきれいで、年を重ねた今も変わらぬ本格アクションができることは、素晴らしいですね。

忘れてはいけない歴史に思いをはせる

「相棒」の特徴は、今、世界のそこにある政治や社会の問題にスポットをあて、エンタメでありながら我々に社会問題を示唆してくれること。今作は警視庁特命係の「相棒」の2人が、これまで類のないような難敵となる謎の国際犯罪組織と対峙（たいじ）します。その犯罪の背景にあるのは「国家に見捨てられた存在」という、今の日本人に非常に大切なテーマです。

その一つが、戦時中の南方への「日本人の移民」。「移民」と聞くとつい外国人をイメージしてしまう人も多いでしょうが、それは違う。戦前は南北アメリカ大陸、そして今回扱うテーマの南洋の島々に移民した日本人が実はたくさんいます。特に南洋の島は激しい戦場となり、住民たちは大変な苦労をされたことは想像に難くない。映画の中で、南洋の島に移住した少年が、母にかばわれ戦火を逃れようとするも母が亡くなり、なすすべもなく一人家に戻り、泣きながら芋をかじるシーンは秀逸。どんなに悲しくてもおなかは空くという、「ひもじさ」と「哀（かな）しみ」など、やるせない感情が伝わってくる。その後、苦労して母国に帰った時に自分が国に見捨てられていたことを知り、どれほどショックだったことか。そういう忘れてはならない歴史に意識を向けさせてくれるのが、本作のすごさです。

もう一つの背景が、外国での日本人少女誘拐事件ですが、これは近年、海外で過激派組織に誘拐され虐殺された日本人の事件があったことで、我々には非常にリアリティーがある。外国の大使館で行われることは記録も後に検証されることもないので、何があったのか我々は知ることができません。映画で描かれていることは現実にはあってほしくない対応ですが、そこにリアルを感じてしまうことは非常に残念な状況と言わざるをえません。

正義とは何かを突きつけられる

悪役にも共感できるところがあるように描くのが日本の映画や物語の特徴だと思いますが、今回もそう。「国に見捨てられた存在」という背景ゆえに犯罪を起こすのは、裏を返せば彼らに日本への愛国心と迷いがあるということ。犯人の行動はこの国に「国民を守る気はあるのか」という切実な問いかけであり、それは我々の心に突き刺さるのではないでしょうか。

今回のような憎悪や呪いを動機に持つ犯罪者に対し、その犯罪行為は否定しつつ、「気持ちはわかります」という水谷さん演じる杉下右京さんに、僕は「雨月物語」の「白峯」を思い浮かべました。簡単にいうと、悪役におとしめられ、死後に怨霊となって悪事を行っていた崇徳院に、陵墓で西行法師が説教をするんですね。これに対して崇徳院は、最初は反論していましたがだんだんと論破され、「だけど自分の中にある呪いの心はどうすればいいのか」という崇徳院に対して、西行が「あなたのような立派だった方ならわかるのではないか」という意味合いのことを伝える。最後に右京さんが取る行動はこれを想起させてくれました。

この作品で描かれる警察の描き方が正しいのかどうか、僕にはわかりません。「特命係」は閑職の部署に有能な人間がいるという設定ですが、僕は今の警察にそんな余裕はないような気がします。むしろ、能力があって余裕がある特命係のような部署が受け入れられる組織であってほしい。この作品が多くの人に受け入れられているのは、巨大組織の柔軟性のなさに重圧を感じている人が多いからではないでしょうか。

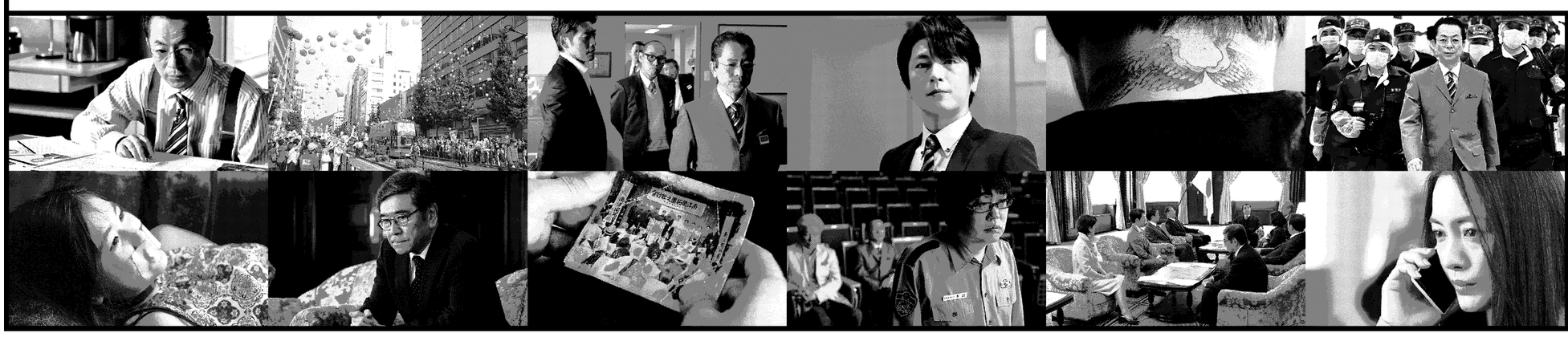
僕は将棋をやるのですが、右京さんの事件の読み解き方や思考法は大変無駄がないと思います。人間が考えられることは限られているので、将棋の読みも膨大な可能性の中からいかに最初の段階で大事なことを読むか、この振るい落としが大事なんです。右京さんはいつも目のつけどころがよく、いいセンスがあると思います。これは経験と豊富な知識があるからこそですね。

一人ひとりに人生があり尊重されることが起点

東京で開催されるアスリートの大パレードがテロに狙われていると右京さんが察知し、警視庁の上層部の会議で警備の強化を願い出た時、絶対的な話ではないからと対応をしぶられるシーン。反町隆史さん演じる相棒、冠城亘さんが会議を記録するといってスマホの画面を向けたとたん、上層部の態度が変わるのがとても面白かった。あのカメラ画面はまさに国民の目です。やはり巨大組織や権力をきちんとした方向に動かすには、国民の目でチェックし可視化することが必要だと、あれを見るとわかりますね。

この映画の大きなテーマは「深い愛」ですが、誰かを愛せる人は、その人の人生に想像が及ぶ人。この映画ではいろいろな過去の事象の描写がきちんとされているので、犯人にも被害者にも共感できるようになっているんですね。誰かを、あるいは何かを愛するには、少し立ち止まって、その人の背景や歴史を知って思いを巡らせてみる。それが愛につながると私には思えます。

また憲法学者として最後に述べさせてもらいますと、憲法や法学から見ると、どんな人にも人生があり、個人として尊重される理念があるということです。しかし国家は時として、放置していると人を数で捉え始める。たとえば100万人生きるには数人の犠牲が必要だというように。今回の映画は、映像として一人ひとりの「目の力」の捉え方を力強く感じました。目というのは、その人の世界を作っている窓です。そこに映像をフォーカスするということは、一人ひとりに人生があることを我々に想起させ、個々の人生を大切にしようという作品からのメッセージに感じられました。みんながよりよき世界で生きようとするには、そこが出発点であるべきだと私は思います。それがないところに正義はありません。（談）



STORY

7年前、英国で日本大使館関係者の凄惨（せいさん）な集団毒殺事件が起こり、その唯一の生き残りだった少女が国際犯罪組織バーズによって誘拐された。しかし、当時の駐英大使と日本政府は“高度な政治的判断”によって、その誘拐事件を闇に葬っていた――。それから7年。行方不明となっていた少女の身代金要求が再び日本政府に突きつけられた。首謀者とされるバーズのリーダー＝レイブンの意図は何なのか？ なぜ少女は7年間生かされていたのか？ レイブンとは何者なのか？ タイムリミットが迫る中、日本政府はバーズをテロ組織と断定、その要求を再び拒否した。その直後、身代金要求は世界を震撼（しんかん）させる無差別大量殺人テロへと様相を変えた。狙われたのは50万人の見物客が集まる世界スポーツ競技大会の凱旋（がいせん）パレード。日本中が歓喜に包まれたパレードの真っただ中、ついに特命係は真犯人を追い詰める。その先には…… 70年前の“ある出来事”から始まる、あまりにも切ない真実が待ち受けていた。

ぴあ映画初日満足度もNO.1!
シリーズ最高の満足度 91.7 点を記録。

今の時代を反映させたような内容で、これまでのシリーズの中で一番面白かった
（50歳・会社員）

今回は予測不可能なところが多く、人間の心、特に日本人としての“心”が表れている
（16歳・高校生）

スケールのデカさ、切ない物語の中にある強いメッセージ性、息のあったふたりの活躍など、長年のファンとして大満足
（24歳・公務員）

『相棒』は時代によって、その時々の問題を取り入れるところがいい。今回は愛と切なさを特に感じた
（20代・公務員）

※ぴあ映画初日満足度調査（2月11日ぴあ調べ）

大ヒット上映中!!

音 バリアフリー上映UDCast方式・音声ガイドに対応しています。
http://udcast.net/

©2017「相棒・劇場版Ⅳ-」パートナーズ　tv asahi